

モーリッツ・フェルマー編著
近づきになりたい
—19世紀以降のドイツにおける対人コミュニケーション—

山本達夫(訳)

人間科学部 人間社会学科 観光文化コース
e-mail:yamamoto@toua-u.ac.jp

本書は、出版時点でリーズ大学（イギリス）で教鞭を執っていたドイツ人歴史研究者モーリッツ・フェルマーMoritz Föllmer編著の論文集『近づきになりたい—19世紀以降のドイツにおける対人コミュニケーション—』の邦訳である。なお、同氏は現在はアムステルダム大学に移籍している。

ここでは、「序章—ドイツにおける対人コミュニケーションとモデルネー」を翻訳し、順次『東亜大学紀要』に掲載していく。翻訳許可は、モーリッツ・フェルマー氏、ならびに論文集を出版したフランツ・シュタイナー出版社から得ている。^{*1}なお、本論文集の執筆者と論文のタイトルはつぎの通りである。

- ・モーリッツ・フェルマーMoritz Föllmer「序章—ドイツにおける対人コミュニケーションとモデルネー」
- ・トビアス・キースTobias Kies「伝え聞き—19世紀初頭における風評コミュニケーションと公共圏—」
- ・アーミン・オーツァルArmin Owzar『『沈黙は金』ヴィルヘルム時代の社会におけるコミュニケーション行動』
- ・ハボ・クノツホHabbo Knoch「ズインメルのホテル—近代社会の隙間におけるコミュニケーション—」

- ・モーリッツ・フェルマー『『いまましいこの人生よ、さらば』ヴァイマル共和国におけるコミュニケーション危機と自殺』
- ・アンドリュー・ステュアート・バーガーソンAndrew Stuart Bergerson「頑固さ、倫理とナチスの命の変革」
- ・ダニエル・モーラートDaniel Morat「沈黙の技術—エルンストおよびフリードリヒ・ゲオルク・ユンガー兄弟、カール・シュミットならびにマルティン・ハイデガーにみる1945年以降の秘伝の会話コミュニケーション—」
- ・ルート・ローゼンベルガーRuth Rosenberger「困難な対話—西ドイツにおける企業内心理学者と企業のコミュニケーション—」
- ・フランク・ボッシュFrank Bösch「コミュニケーション行動としての政治—1950年代60年代における政党幹部の会話形式とその変容—」
- ・サンドリーヌ・コットSandrine Kott「政治的なものの脱政治化—東ドイツにおける個人間コミュニケーションの形成と限界—」
- ・アンケ・バールAnke Bahl「隔たりの解消—オンライン・コミュニケーションの傾向—」

緒言

本書は、歴史&理論ワーキンググループの討論

会が発端となっている。この討論会は、「交換関係—19世紀と20世紀における対人コミュニケーション」をテーマとして、2002年2月28日から3月2日にかけてゲティンゲンで開かれた。なお、アンドルー・ステュアート・バーガーソン・Andrew Stuart Bergersonとサンドリーヌ・コットSandrine Kottの論文は、討論会の閉会后に提出された。

まず最初に、ツァイト財団エーベリンEbelinとゲールト・ブケリウスGerd Bucerius氏に心からお礼申し上げたい。同氏の気前がよく手続き簡素な支援がなければ、討論会も論文集も実現できなかったであろう。ハボ・クノッホHabbo Knoch, ダニエル・モーラートDaniel Moratとイエレン・ヴァインホルトJörn Weinholdは、組織運営上のさまざまな困難を取り除いてくれた。アレクサンダー・ゲッペルトAlexander C. T. Geppert, アレクサ・ガイストヘーフエルAlexa Geisthövel, ウッフア・イェンセンUffa Jensen, ティル・ケスラーTill Kössler, パオル・ノルテPaul Nolteとトルステン・ヴァーグナーThorsten Wagner〔以上敬称略〕からは、各セクションでコメントをいただいた。当日参加した歴史&理論ワーキンググループの会員は、討論会の推進役になってくれ、討論会が支障なく生産的に進行することに大いに貢献してくれた。最後になったが、積極的かつ献身的に参加してくれた報告者ならびに執筆者一同に感謝したい。

ベルリンにて、2003年9月 モーリッツ・フェルマー

序章 ドイツにおける対人コミュニケーションとモデルネ²

モーリッツ・フェルマー

I. 近年、個人間のコミュニケーションは、文化・社会科学の中心的なテーマになっている。歴史学でも、個人間のコミュニケーションへの関心は高まってきている。家族や友人、隣人との関係、ことばのやりとり、自発的な集まりといったものは、不易で陳腐な現象ではなく、文化的・歴史的にかなりの程度、また社会的にはきわめて重要な現象であると思われる。これらは、これまでずっと民族学と近世ミクロヒストリー研究の独壇場であっ

たが、近年、19・20世紀を対象とする歴史家にとっても魅力的なテーマとなっている。というのも、個人間のコミュニケーションは、「面と向き合う社会face-to-face society」の中心に位置しているばかりではなく、³近代世界の成立と密接に関わっていたし、現在も関わっているからである。ある一定のコミュニケーション形態・ネットワークが原因となっているものとしては、たとえば、アメリカ合衆国で電話が比較的早く普及したこと、CDU（ドイツ・キリスト教民主同盟）でヘルムート・コールHelmut Kohlが長期間権力の座にあったこと、東西ドイツ人のあいだで相互理解がなかなか進まない問題、あるいは現在、マスメディアの情報が先占されていることなどがある。⁴

現実には起こっている生活世界の激変や隣接科学からの刺激とならんで、歴史学の議論そのものも、人間の意思疎通の形態を歴史の文脈で考察するHistorisierung契機になっている。近年ますます明らかになってきたのは、神話やシンボル、ステレオタイプ、創られたアイデンティティといったものは、それらをコミュニケーションの緊張の場において研究しないかぎり十分な成果が出せないということである。そもそも初期段階の文化史の次なる課題は、文化史の内容および方法論上の多様性を拡大することである。こうすることで、「グループ」「権力関係」あるいは「社会」といったカテゴリーを見直すこともできるのである。この点について個人間のコミュニケーションは、とくに期待のもてる領域だといえる。そのためには、一方で個人間のコミュニケーションを広い問題設定とプロセスに結び付けて考察し、他方では、コミュニケーションの肯定的な局面のみならず、その脆弱性と潜在的な破壊性も考慮に入れる必要がある。これについては、社会史、日常史、ジェンダー史からの貴重な提言と先行研究がある。ただし、それらは従来、体系的に関連づけられることはなかった。

以下、「対人コミュニケーションinterpersonale Kommunikation」もしくは「個人間のコミュニケーションKommunikation zwischen Personen」というのは、人間が—メディアを媒介としたコミュニケーションと違って—じかに接触し、異なる性格を交換し合う関係に入る場合とする。これには、

その場に居る人たちの中でのコミュニケーション（この場合は「相互作用」という概念も使われる）、および、文通相手や電話の相手といった、その場に居ない人との間のコミュニケーションも含まれる。19世紀以来のドイツにおける個人間のコミュニケーションを歴史の文脈で考察する *Historisierung* ということは、さまざまな疑問を生ずる。こうした試みには、どのような理論・方法論を適用できるのか？うわさや、居酒屋の客同士や家族間のいざこざ、あるいは諸団体の内部活動といった一見異質なテーマ領域をこの観点から研究し、体系的に結び付けると、どのような成果が得られるか？また、個人間のコミュニケーションは、より大きな展開とどう関連づけることができ、それには、どのような解釈や期待が結びついていたのか？そして、このテーマ設定は、政治的、文化的、社会的な激変のあった19世紀と20世紀のドイツ史において、どのような位置を占めているのか？

本書では、これらの問題がさまざまな視点から扱われる。

本書の構想がもたらした何よりの成果は、コミュニケーションの特定の場面を正確に再現し、包括的にコンテクスト化することで、私圏（私領域）と公共圏という緊張に満ちた場を新たな視点から洞察できたことである。^{*5}そこでの重要なテーマは、人間関係における親疎の関係である。モーリッツ・フェルマーの論文は、自殺を手がかりとして、ヴァイマル共和国におけるギムナジウム、夫婦生活、家族の内的生活をさぐり、当時の世代間の葛藤を、いかに特別にコミュニケーション危機として解釈できるかを示した。アンケ・バルは、さまざまな問題はあるにせよ、インターネットが開いた新たな接触のチャンスを論じている。インターネットのおかげで、これがなければ出会わなかった人たち、あるいは一容姿が気に入らなければことにそうだが一潜在的パートナーとして受け入れなかったであろう人たちと関係を結ぶことができるのである。コミュニケーションの空間的および社会的な条件は、ハボ・クノッホの論考でも論じられている。ヨーロッパの宮廷ホテル「ランゲン・ヤールフンデルトヴェンデ」では、客たちは他人同士であったものの、他面では、社会文化

的に相通じるものや、馴染みのあるセッティングには心を許すことができたのだ。このことは、他人とのコンタクトを容易にし、堂々とした社交の可能性に道を開いたのである。

つぎに調査対象になる領域は労働生活である。経営内におけるコミュニケーションの形成は、長らく論争されてきた経緯があるので、コミュニケーションは「社会的なものの学問化」の領域のひとつに昇格した。^{*6}ルート・ローゼンベルガーは、1950年代に経営心理学者が、経営指導部と従業員間の対話という新たな原則を導入することによって、コミュニケーションの専門家として地位を先駆的に確立したことを明らかにしている。東ドイツでは、サンドリーヌ・コットが示しているように、経営活動は、社交性の歴史や政策とずっと強く結びついていた。党と国家は、ことばによるコミュニケーションをきびしく制限し、労働現場における合法的な「不平不満」が公的な議論や政治的な抗議に変わるのを長年にわたって阻止したのである。

個人間のコミュニケーションに視線を注ぐことは、統合と排除のメカニズムをこれまで以上に浮き彫りにするので、新たな政治的文化史を開拓できる。フランク・ボッシュが論文で中心的にあつかっているのは、コンラート・アデナウアがキリスト教民主同盟の党指導部のメンバーを束ねてコントロールした巧妙さである。この巧妙さのおかげで、アデナウア首相は、議論の趨勢がはっきりとし、いっそう開かれたコミュニケーションという新たなスタイルに行きつくまでは、長きにわたって成功をおさめたのだ。アーミン・オーツァルは、ドイツ第二帝政下の居酒屋における政治的なコミュニケーションを研究した。そして、さまざまなミリエー〔社会的環境〕が互いにはっきりと区分けされ、しかも常に新たに創られていったことを示している。ナチズムにおけるユダヤ人少数派の排除を論じているのは、アンドリュー・ステュアート・バーガーソンである。バーガーソンは、たとえばナチス式敬礼の導入が、多数派を統合し、他方、迫害される少数派が重大な道徳的葛藤状況に置かれたことを明らかにしている。

このほかの有意義なテーマとしては、個人間のコミュニケーションと公共圏の相互関係がある。

メディアの公共圏がなお十分に形成されていないか、欠如しているか、あるいは意図的に拒否されている場合、この相互関係はとくに緊密であった。トビアス・キースが論じている19世紀初頭の農村社会におけるうわさ話は、この第一のケースにあたる。農村のうわさ話は、教会ヒエラルキーの近代化圧力に対抗する情報伝達ならびにコンセンサスの形成に役立った。ダニエル・モーラートは、戦後期の法曹知識人を分析した。法曹知識人たちは、あるいは脱ナチス化のために、あるいは独自のエリート気取りが原因で、メディア公共圏を避けたのだ。その代わりに、法曹知識人たちは、ごく小さな内輪の公共圏の中だけでぼやいていたのである。これは、連中の何人かがドイツ連邦共和国建国期の黎明期の討論文化に足を踏み入れるまで続いた。この例は、19・20世紀のドイツにおける個人間のコミュニケーションに立ち戻ることが、常に深刻な問題の性格を有していることを示している。このテーゼは、以下で詳細に検討しようと思う。

*1 翻訳許可は2011年3月2日付けで、東亜大学紀要編集委員会が保管している。

*2 テーマを提起し、批判してくれたことに対して、キリル・アブロシモフ Kirill Abrosimov, トーマス・ビスкуп Thomas Biskup, フランク・ボッシュ, ハボ・クノッホ, ダニエル・モーラート, ニーナ・フェアヘイエン Nina Verheyen の各氏, ならびにバルリン・フンボルト大学における2002/03年度後期の私の演習「近代における個人間のコミュニケーション」に参加してくれた諸氏に感謝する。本書は、歴史と理論ワーキンググループがかなり長いあいだ取り組んできたコミュニケーションの歴史化という文脈の中にある。討論会の報告書ならびにプログラムは次を参照。www.geschichte-und-theorie.de。および Habbo Knoch / Daniel Morat (Hg.), *Kommunikation als Beobachtung. Medienanalysen und Gesellschaftsbilder 1880-1960*, München 2003。アレクサンダー C. T. ゲッペルトとウッファ・イェンセン, イェルン・ヴァインホルトが編集した空間とコミュニケーションの関係に関する論文集は準備中である。

*3 Peter Laslett, *The Face to Face Society*, in ders. (Hg.) *Philosophy, Politics, and Society*, Oxford 1967, S. 157-184.

*4 Werner Rammert, *Telefon und Kommunikationskultur. Akzeptanz und Diffusion einer Technik im Vier-Länder Vergleich*, in: *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie (=KzfSS)* 42 (1990), S. 20-40; Frank Bösch, *Macht und Machtverlust. Die Geschichte der CDU*, Stuttgart 2002, S. 108-147; Olaf Georg Klein, *Ihr könnt uns einfach nicht verstehen! Warum Ost- und Westdeutschland aneinander vorbeireden*, Frankfurt 2001; Michael Schenk, *Soziale Netzwerke und Massenmedien. Untersuchungen zum Einfluss der persönlichen Kommunikation*, Tübingen 1995.

*5 この点については、政治の文化史の貢献もある。参照, Thomas Mergel, *Überlegungen zu einer Kulturgeschichte der Politik*, in: *Geschichte und Gesellschaft (=GG)* 28 (2002), S. 574-606.

*6 Lutz Raphael, *Die Verwissenschaftlichung des Sozialen als methodische und konzeptionelle Herausforderung für eine Sozialgeschichte des 20. Jahrhunderts*, in *GG* 22 (1996), S. 165-193.